

コンケン大学教育学部日本語教員養成課程における教育実習の実践報告 ——教授法クラスの模擬授業と教育実習の体験から——

有本 昌代

1. はじめに ～教授法クラスの位置づけ～

コンケン大学は、タイにおける日本語教育の発展を目的とし、2004年から同大学の教育学部に日本語教師養成プログラムを設け、主にタイの中等教育機関におけるタイ人の日本語教師養成のために指導を行っている。本稿はそのプログラムに設けられた教授法のクラス（Teaching as a Second Language）の実践報告を行うことを目的とする。

コンケン大学教育学部（通常5年間）の日本語教師養成プログラムでは2007年6月の時点で4学年（1年生から4年生）が在学し、5年次には1年間の教育実習のため、主にイサン地方で日本語指導を行っている中等教育機関にて日本語指導に関わることとなる。今回報告するのは、2007年6月から9月（4年生前期）に行われた教授法（Teaching Japanese as a Second Language）のクラスで、コンケン大学において初めて行われた日本語教育の教授法のクラスである。コンケン大学教育学部において日本語教師養成プログラムが設置されたのは2004年であるため、2008年3月の時点ではまだ卒業生は出ておらず、カリキュラムやシラバスなどはまだ開発段階にあるが、本報告のように、年少者の日本語教育の視点を取り入れた教授法の指導と実習のクラスはタイ国内においても報告がなく、今後のタイにおける日本語教育の発展の一参考となることを期待する。

2. 教授法指導の実践報告

2.1 教授法クラスのシラバス

以下は、中間試験（2007年6月から7月）までに行われた講義形式の授業のスケジュールをまとめたものである。全体の流れとして、世界とタイにおける日本語教育の概観、日本語とタイ語の対照比較、教授法、成人と年少者（主に小・中学生）の言語教育、技能別の指導法、クラス活動についての講義を行った。

タイトル	指導のテーマ	指導内容の詳細
第1回 世界の日本語教育・タイの日本語教育	・世界の国で、どれくらいの人が、日本語を勉強しているか。 ・タイでは、何人の人が、またどんな人が日本語を勉強しているか。 ・タイの日本語教育は、どんな様子か。	国際交流基金のホームページに記載されている2003年度『世界の日本語教育』の調査結果における「学習者数の国別構成」「タイの日本語教育」のページを参照し、世界とタイにおける日本語教育の実情を概観し、その特徴を

育		まとめる。
第2回 言語教育	・ 母語と第二言語は同じか。 ・ 間違いは恥ずかしいことか。 ・ ネイティブではない教師は、いい教師か。	グループになり、母語と第二言語に関する習得法、勉強法の比較を行った。さらに日本語とタイ語の共通点、相違点などについて対照比較を行い、正の転移、負の転移についても学んだ。また、日本語のネイティブ教師とノンネイティブ教師の長所と短所についてもディスカッションを通して、理解を深めた。
第3回 日本語教育とカリキュラム	・ 日本語を教えるときに、何をしなければいけないか。 ・ どうやって日本語を教えるか。 ・ どうやって日本語を教える計画を立てるか。	学習目的と指導法の間関係を考え、コース・デザイン、カリキュラム・デザインの基本となる知識を学んだ。
第4・5回 外国語教授法1・2	・ 日本語をどうやって教えるか。 ・ どんな教え方があるか。 ・ 効果的な教え方はあるか。 ・ 大人と子どもで、教え方は異なるか。	『日本語教授法ワークショップ』のテキストとDVDを使用し、基本的な教授法を指導し、その長所と短所についてもディスカッションを通して指導した。
第6回 子どもの日本語教育	・ 大人と子どもの言語習得 ・ 大人にはどんな教え方をすればいいか。 ・ 子どもにはどんな教え方をすればいいか。	大人と子どもの言語学習法の違いを考え、そこから子どもを対象とした効果的な言語指導法とは何かについて指導を行った。
第7回 初級の指導法<文字>	・ なぜ、日本語には3つの文字があるか。 ・ どうやってひらがなやカタカナ、漢字を教えるのか。 ・ どの順番で文字を教えるか。 ・ 漢字には、どんな種類があるか。	『外国人教師のための日本語教授法』を参照し、日本語の基本的な言語学、日本語学の知識を指導した。文字の指導法として連想法を用い、学生がそれぞれのひらがなから連想されるタイ語の言葉を考え、絵カードを描き、実際にその絵カードを用いて文字指導の実践を行った。

第 8 回 初級の指導法＜発音＞	・ タイ語と日本語の発音は、どこが違うか。 ・ 難しい発音は何か。 ・ 上手に発音するために、どうやって教えるか。 ・ ノンネイティブの教師が発音を教えるときは、どうするか。	『外国人教師のための日本語教授法』を参照し、基本的な日本語の発音の基本知識を養った。アクセント辞典を参照し、アクセントの調べ方、アクセント記号に基づいた発音の仕方を学習した。
第 9 回 初級の指導法＜語彙＞	・ 日本語にはどんな言葉があるか。 ・ どんな言葉を教えればいいのか。 ・ どうやって言葉を教えればいいのか。	理解語彙、使用語彙の違いについて学び、学習者のレベルと目的に合わせてどのような言葉を指導すればいいのかを指導した。また、日本語学習者がよくする誤用例をもとに、その訂正の仕方、誤用の説明法について実例を交えて指導した。さらに、3～4 人程度のグループを作り、曜日、数字、家族の名称などのトピックをもとに、語彙指導の模擬授業を行い、語彙指導の際の注意点について指導を行った。
第 10 回 クラス活動	・ どんな練習方法や活動があるか。 ・ それぞれの練習の特徴や目的は何か。 ・ 学習者は、練習や活動から何を学ぶか。	オーディオ・リンガル法の代表的な練習方法をもとに、口頭練習方法の知識を養った。また、クラス活動の種類として、ロール・プレイやドラマ、ゲーム、インフォメーション・ギャップ、ディスカッションなどの例を取上げ、指導した。
第 11 回 教材研究と教案作り	・ どんな教材があるか。 ・ どうやって教材を使うか。 ・ どうやって授業の計画を立てるか。 ・ 授業で大切なことは何か。	シラバスの種類と、それにもとづいた教科書を取上げ、その特徴を学んだ。『みんなの日本語』『初級日本語』『日本語 あきこと友だち』『にほんごかんたん』『日本語よろしく』の成人向け及び年少者向けの教科書を取上げ、グループで各課の構成、目標文型の提示法、練習問題の種類の比較を行った。さらに、導入、練習、展開の授業の基本となる流れと特徴、内容、時間配分について指導した。

以上が 2007 年前期の中間試験前の指導内容である。中間試験以降（2007 年 8 月から 9 月）は、

各学生一人一人が一つの課を担当し、教案作成と模擬授業の実践を行った。以下にその模擬授業の指導内容とそのフィードバックについてまとめる。

2.2 模擬授業の実践報告

模擬授業で使用したテキストは、成人用テキストとして『初級日本語』『みんなの日本語』、年少者用のテキスト（主に小学生から中学生）として『日本語 あきこと友だち』『日本語よろしく』『にほんごかんたん』で、学生が担当したい課を選択させた。以下に担当したテキストと課、指導の流れ、教師からのフィードバックをまとめる。

【模擬授業 1 回目】

指導日	8 月 10 日	模擬授業担当者	N さん
テキストと課	『にほんご かんたん』第 11 課		
指導内容	～が好きです		
教師からのフィードバック			
・ 指導文型を提示する前の語彙の導入段階で、「そろばん」「いけばな」「けんどう」など日本の文化に関連する語彙の導入を行った。しかし、これらの言葉に関する説明がなかったため、日本文化の一環としてきちんとした文化的な言葉の説明の必要がある。もしくは、新しい文型（「～が好きです」）の学習に焦点をあてて指導するのであれば、「～が」の語彙の部分には「テスト」「勉強」「日本語」などのより生徒の身近な既習の言葉を入れて練習する方が、新しい文型の学習がスムーズに行く。 ・ 板書を効果的に取り入れること。板書が一切なかったため、口頭での文型練習にとどまったが、目標となる文型の形はきちんと板書する必要がある。 ・ 子どもを対象とした練習法の注意点として、書く練習よりも先に話す練習をする方がいい。小学生や中学生の場合、50 分の授業であっても集中力が長く続かないため、大学生と異なり、1 時間の間に「聞く」「読む」「話す」「書く」の四技能を組み合わせた構成をとることが望ましい。			

【模擬授業 2 回目】

指導日	8 月 10 日	模擬授業担当者	K さん
テキストと課	『にほんご かんたん』第 15 課		
指導内容	Describing How Things Are （い形容詞）		
教師からのフィードバック			
・ コンピューターを活用し、表側に写真、裏側に言葉を入力して語彙カードを効果的に作成していて良かった。しかし、A4 サイズで作成したため、人数の多いクラスでは見えに			

くくなる。

- ・ 担当した課に「大きい」「小さい」「新しい」「古い」などの言葉を提示する際、「い形容詞」という文法用語を用いていたが、子どもを対象として指導する際、文法用語はなるべく避けて指導することが望ましい。中学生以下の生徒の場合、文法的な事項の理解力がまだ十分でなく、説明を多くするよりも、例文や活動で理解し、覚えられるようにするほうが効果的であるからである。
- ・ 一つの課に「これは～です」「この～は、～です」「～くないです」「どんな～」という4つの指導文型を含んでいるが、一回の授業で指導する文型をしぼり、その文型について説明→練習→活動というサイクルで指導すること。一度に説明をしても覚えられないし、説明の間ずっと集中することが難しい。
- ・ 全体的に練習量が少なく、教師と生徒のやりとりがほとんどで、当てられていない生徒は発言しない上、聞いていないことが多い。また、発言していない生徒はクラスメートで関係のないおしゃべりをして騒ぐ。クラス全体の発話量、練習量を増やすために、生徒同士のペアでのやり取りを取り入れるといい。練習の種類もさまざまなものを取り入れ、単調にならないようにする必要がある。

【模擬授業3回目】

指導日	8月15日	模擬授業担当者	Pさん
テキストと課	『にほんご かんたん』第17課		
指導内容	～に～がある／いる		
教師からのフィードバック			
・ 発音とアクセントが正確ではないので、授業の前にアクセント辞典などで調べておく必要がある。 ・ 語彙の導入と文型の説明の後、すぐに活動に移ったが、基本文型の口頭練習をしっかりと行う必要がある。導入後すぐに活動をして学習内容が理解、定着したかどうかかわからないので、練習したことをもとに、アウトプットとして活動を行う流れをしっかりと踏むことが望まれる。 ・ 活動で使った絵が見にくく、店や場所の名前が不明確であったので、活動前にしっかりと必要となる語彙を確認しておく必要がある。 ・ 今回行った活動は生徒一人ずつくじを引いて、その番号と黒板に張られているポスターの場所の番号を合わせて、「～があります」の文型に当てはめて文を作る。この活動で行った内容は単純すぎて、活動の楽しさ、活発さが無い。活動の目的を明確にして、イン			

フォメーション・ギャップなどのように達成感が味わえるものを工夫することが求められる。

【模擬授業 4 回目】

指導日	8 月 15 日	模擬授業担当者	U さん
テキストと課	『初級日本語』第 1 課		
指導内容	「～は～です」「これ、それ、あれ」		
教師からのフィードバック ・ 指導する内容が多すぎて、授業の流れが速い。 ・ 授業の構成が全体的に単調で、つまらない。文法中心すぎて、大学生向け、成人向けという印象を受ける。『初級日本語』は成人向けのテキストであるため、内容上成人向けになる傾向は生じるだろうが、同テキストを年少者に使用するのであれば飽きさせない構成を工夫する必要がある。 ・ 絵カードを作成しているが、効果的に活用していない。教具の有効な使い方も考えておく必要がある。 ・ ペア練習を取り入れて、発話練習量を増やしていたが、説明の後すぐにペア練習をすると、練習のやり方が正しいかどうかチェックできない場合があるので、まず全体で解答をチェックしてからペア練習をさせ、定着のための発話練習をすることが望ましい。 ・ 年少者の場合、特に初級レベルの場合は、一つのレッスン（50 分）の中に導入する文法は一つに絞り、まず練習や活動を取り入れ、理解、定着を図ってから、次の文法の指導へ進むことが望ましい。年少者の場合、一つの授業の中で、さまざまな要素や練習、活動を取り入れ、理解、定着練習を行うことの方が望ましいといえる。			

【模擬授業 5 回目】

指導日	8 月 15 日	模擬授業担当者	S さん
テキストと課	『初級日本語』第 14 課		
指導内容	「～ことが好きです」		
教師からのフィードバック			
・ 導入段階として、既習事項の「N が好きです」の導入から始めた点は評価できる。その後、「辞書形＋ことが好きです」の新しい文型の説明を始めたが、新しい文型の導入に入る前に動詞カードを使って辞書形の復習練習を取り入れればさらによくなるであろう。子どもの場合、すでに指導済みのことであっても何度も復習を重ねて繰り返し指導する			

ことが効果的であると言える。

- ・ 教師は文型の説明をしすぎる傾向にあるので、文法説明よりも練習をたくさんさせる方が理解できたか、定着したかどうか見ることができる。また、ペアやグループを作り、発話練習をさせた後は発表させる。生徒自身に学んだことをアウトプットさせ、授業の達成感を味わわせることで授業が活性化するので、練習をやりっぱなしのまま終わらせないようにしなければならない。
- ・ 活動の段階で、教師がターゲット文型の「～は、～ことが好きです」ではなく、「～の好きなことは、～ことです」という発話をしていたが、この文型は目標文型ではないので、教師は、生徒の既習事項を念頭に置き、生徒が混乱しないように未習文型の使用は避けるようにする。

【模擬授業 6 回目】

指導日	8 月 22 日	模擬授業担当者	W さん
テキストと課	『みんなの日本語』第 7 課		
指導内容	基本動詞「～ました」		
教師からのフィードバック			
・ 絵カードの文字が小さく、持つ位置が低いので、後ろの席まで見えない。 ・ 言葉の確認をタイ語で行ったが、タイ語の使用は必要であれば、活用してもかまわない。特に年少者の場合、日本国外では日本語だけで授業をすることは難しく、生徒の母語を効果的に取り入れることは必要になると考えられる。しかし、基本的なあいさつやクラスの指示（「聞きましょう」「書きましょう」など）は日本語できちんと理解できるように、日本語で通じるところは理解できる日本語を用いることが好ましい。 ・ 「～ました」を導入する際、時間的な関係がよく理解できるように、時系列の表を板書し、視覚的に理解できる工夫をする。また、板書をする言葉は重要な事柄にしばらく、書いた後すぐに消さず、生徒がノートに写したかどうか確認してから消す。 ・ 大学生の傾向としては、すぐにテキストを読ませる傾向がある。しかし、年少者の場合、まず「聞く」技能をしっかりと身に付けさせることが重要、かつ効果的であると考えられるので、「聞く」ことを取り入れた活動のあと「読む」ことを取り入れた活動を行うことが望ましい。活動の際、文法練習中心にならないように、コミュニケーションを中心としたものを考える。			

【模擬授業 7 回目】

指導日	8 月 22 日	模擬授業担当者	J さん
テキストと課	『みんなの日本語』第 9 課		
指導内容	「～が好きです」「～が嫌いです」「～が好きですか」「何が好きですか」		
教師からのフィードバック ・ 全体的にまとまっていて良い。教える流れもステップを少しずつ提示していて、理解しやすい。ただ、板書を工夫すればもっと良くなる。 ・ 新米の教師はすべて自分でやろうとする傾向があるので、教師が何を教え、何を生徒にさせるかを十分考えておくといい。授業で大切なのは生徒の学びが最優先であり、教師がすべてするのはないことを念頭においておかなければならない。 ・ 会話文（問題 C）指導では、教師が会話文を読み、代入練習の問題を生徒に当てて終わっていたが、コミュニケーションを目的とした活動を工夫するといい。例えば、指導した基本となる会話文を何度も練習し、A パートと B パートを生徒に当て、覚えさせて発表させる、代入する言葉をテキストで提示されたものを発展させ、生徒自身に言葉を入れさせて発表させるなど、少しの工夫で達成感のある活動が行える。			

以上が教授法の授業で行った模擬実習のまとめである。なお、紙面の都合上、今回本稿に紹介した模擬授業は実際に行った一部であることを了承いただきたい。

3. 教育実習の一日体験

コンケン大学教育学部には、大学付属の小学校と中・高等学校が設けられている。日本語教師養成プログラムだけではなく、教育学部の 4 年生前期に在籍する各教科の学生は、数名ずつのグループに分かれ、小・中・高校を訪れ、教育実習の体験をする。各学生が実際に授業を担当するのはそれぞれ 1 回ずつ程度で、それ以外の日には他の学生の実習を観察し、授業後、学生全員で教師（基本的に付属学校の教科担当教師）とディスカッションを行う。筆者は 2007 年前期に学生と共に付属学校の教育実習に付き添い、付属学校の教科担当教師と共にフィードバックを行った。

模擬授業と教育実習体験を通して、共通して言える内容をまとめると、以下の点が挙げられる。

- ・ 授業の準備、計画をしっかりと立てる。
- ・ 教授法の特徴をしっかりと考え、目的にあったものを活用する。
- ・ 目的にあった指導の方法と学びの過程、活用する教材、メディアを考える。
- ・ クラスコントロールの技術を身につける。
- ・ 達成感を味わうことができる活動、ほめ方を身につける。
- ・ クラスが単調にならないように、四技能を効果的に組み合わせる。

また、学生の感想として、以下の事柄が得られた。（誤用について、そのまま記載する。）

- ・ 楽しかった。教えたときにどんな教え方がい分か分かる。
- ・ 大変でした。教材と活動を準備しなければならないし、教え方を考えて、とても難しかった。
- ・ 教え方を考えることが難しかった。
- ・ 発音と文法と説明の仕方が上手になりたい。
- ・ 中学校で教えるときは生徒が多いので、コントロールが大変だと思う。友達と話して、先生の話の聞かなかった。(ここでの「先生」というのは、実習生のことである。)
- ・ 授業をおもしろく、上手に話したい。
- ・ 時間配分が上手にできず、早く終わってしまった。

4. さいごに

コンケン大学の学生は、学生時代に教育実習という形で実際に日本語教育に携わることができる。その際、学生に身を持って体験してほしいことは、まず小・中・高校に在籍する児童生徒を対象とした日本語教育は、成人向けの日本語教育とは異なるということである。つまり、成人になってから日本語を学んだ彼らにとっては、自分たちが学んだ方法と実際に年少者に対する教え方が違うということを身をもって学んでほしいということである。そのためには成人と年少者の特性をよく理解し授業を計画すること、さらに日本語のノンネイティブとしていかに学生の興味を引き出し、日本語を教えることができるかが重要である。また年少者の場合クラスコントロールも日本語の教授法と同じくらい重要なスキルであると言えるであろう。

現在、日本においても年少者に対する日本語教育が注目されてきているが、年少者向けの日本語教材や教授法はまだまだ少なく、整っていないのが現状である。タイにおいても今後初等、中等教育機関における日本語学習者数の増加が見込まれるため、年少者の日本語教育の発展に力を入れていくことが予想されるが、その際単に日本語教育の視点からだけではなく、年少者の日本語教育という視点を持ってその発展に取り組んでほしいと願う。

今回実施した教授法のクラスはコンケン大学教育学部において初めての試みであった。そのため教授法クラスの指導プランやスケジュール、指導内容において改善が必要である。また当時コンケン大学教育学部には日本人教師2名、タイ人教師2名が在勤していたが、タイ人教師は学生時代に大学において日本語教育を専門に学んでおらず専門知識を有していないこともあり、今回は日本人教師が日本語で講義を行い、タイ人教師がタイ語で通訳するというティーム・ティーチングで指導にあたった。今後大学や大学院においても日本語教育の専門知識も指導できるタイ人の人材育成も望まれ、カリキュラムや指導内容をより充実させていくことが求められると言える。

普段の授業では受身的な態度の学生も、模擬授業と教育実習の経験を経て、間違った日本語を教えない、日本語を上手に教えたいという日本語教師としての自覚を認識し、かつ学生自身が小・中・高校の児童生徒の見本となるため、積極的、自発的に授業の準備と実習に取り組んだ点は評

価に値し、今後の彼らの日本語学習の動機付け、目的意識の強化につながったと感じる。コンケン大学教育学部の学生は、将来初等、中等教育機関において日本語を教えることとなり、教授法のクラスでの模擬授業、一日教育実習の体験で学んだことを多いに活用し、タイにおける年少者の日本語教育の現場で活躍することを期待する。最後に、5年間の日本語教師養成プログラムを設置するコンケン大学の果たす役割は大きく、タイの年少者の日本語教育の発展に大いに貢献し、年少者を対象とした日本語教育の中核をなしていくべき存在であると認識する。コンケン大学における今後の日本語教師養成プログラムのより一層の発展を期待する。

参考文献

- カナダ日本語教育振興会（CAJLE）（2000）『子どもの会話力の見方と評価=Oral proficiency assessment for bilingual children:バイリンガル会話テスト（OBC）の開発』Toronto
コリン・ベーカー、岡秀夫訳『バイリンガル教育と第二言語習得』大修館書店
太田垣明子（1996）「教科学習に必要な言語能力に関する一考察 ―第二言語教育の立場から―」
『千里国際学園研究紀要』4号、pp.103-114
太田垣明子（1997）「教科学習のための指導に関する一考察 ―年少者日本語教育の立場から―」
『日本語教育論集 13』、日本語教育長期専門研究報告、pp.57-74
中島和子（2001）『バイリンガル教育の方法 12歳までに親と教師ができること』アルク
山本雅代（1999）『バイリンガルの世界』大修館書店
Cummins,J.& Swain, M.（1986）*Bilingualism in Education*. London: Longman

使用テキスト

- 鎌田修・川口義一・鈴木睦（1996）『日本語教授法ワークショップ』凡人社
国際交流基金（2001）『外国人教師のための日本語教授法』日本語国際センター研修用教材
国際交流基金（2004）『日本語 あきこと友だち』紀伊國屋書店（タイランド）
国際交流基金「海外の日本語教育に関する調査および情報の提供・広報」『国際交流基金』
<http://www.jpf.go.jp/j/japan_j/1.html> 2008年3月
スリーエーネットワーク（2000）『みんなの日本語』スリーエーネットワーク
坂起世・吉岐久子（1988）『にほんごかんたん』研究社
泰日経済技術振興協会付属語学学校『日本語よろしく』泰日経済技術振興協会
東京外国語大学留学生日本語教育センター（1994）『初級日本語』凡人社